

「つくりかたの思想史」はつくる背景にある思想を知る研究室。研究員の朝比奈、佐藤（成）、ササキによる。「インスタント／インスパイア教養」をキーワードにブックガイドを作成。

はじめに

つくりかたの思想史研究室（以下、思想史研）は、芸術の諸ジャンルや文化活動において、制作の背景にあった思想・発想（つくりかたの思想）の研究を行い、その変遷をまとめ、大きな見取り図として示すことを試みました。

情報が氾濫した現代に必要な、インスタントに／インスパイアする「教養」のかたちを提案するため、「朝比奈竜生によるアートのための教養ブックガイドα版」を制作し、『だれかのみためゆめ 展示と実演』で発表しました。その後ブックガイドを増刷し、活動を停止します。ブックガイドは、さまざまな芸術・文化の分野や、思想・哲学やアートマネジメント、批評など、一九の分野について概説書や入門書を中心に網羅的に本を載せ、簡単に紹介するコメントを書いたものです。全分野を合わせて五〇〇冊ほどの本が紹介されています。アーティストにとっても、観客にとっても有用な「つくりかたの思想」に触れる

ことを目指した本のリストです。

ブックガイドで何を目指したか

ブックガイドをつくった目的は、基本的には文化・アートに関わる人がもつ共通言語や教養といったものをつくることです。現代アートでは制作の背景となるアイデアが重要であり、作者の意図を知るのは観客としても面白いのではないか、あるいは、作者の立場として他分野のアーティストの発想が刺激になるのではないか、ということが元々の狙いのひとつでした。当初はかなり即物的な「教養」を目指していましたが、制作の途中で、別のことも考えるようになりました。

つくりかたの研究所自体が、メンバーの多くが演劇やダンスに関わっているとはいえ、それぞれ背景が異なり、また、バス企画が失敗したこともあり、共通の体験もなく、共通言語に乏しいように感じていました。また、研究所に限らず、日本の演劇の世界では多様な形態があることもあってか（これは日本の演劇の豊かさでもあると思うのですが）、共通言語が乏しいように思えました。

僕自身、大学の演劇サークル出身ですが、基礎的なことを知ろうと思っても、周りには良い本を勧めてくれる人はいませんでした。本にこだわるのは、「なんとなく経験を重ね

たり、先輩の話聞く」ことで学んでいくのではなく、「とりあえず、これだけ読んどけ」という信頼できる本のリストを読む方が、効率が良く、情報の出所がハッキリして信頼できると思ったからです。異なる芸術・文化のジャンルに関しては、なおさらだと思います。

この共通言語をつくる上で、全体をざっくり見通すこと、わかりやすいことが重要だと思います。ピエール・バイヤールの『読んでいない本について堂々と語る方法』という本には、ある本について語るときに重要なのは、その本の内容の細部ではなく、その分野での一連の重要書Ⅱ「共有図書館」内での位置づけであり、細部より、ざっくり全体を見通すことが大事だ、と書かれています。この「共有図書館」をつくるのが、ブックガイドの目標なのかもしれません。そして、わかりやすければ、情報を得るために必要な時間ややる気のコストが低くなり、そのコストを気にして（Ⅱ勉強するのが面倒くさくて、時間がなくて）情報を得ようとしなかった人に情報が届きやすいと思いました。

共通言語

共通言語とコミュニケーションの問題について、日本社会全体から考えてみます。ブックガイドでは全体を見通すことにこだわっていますが、全体を見通せない、ということとは、日本の現代社会が抱える問題ではないか。多様性の時代になっていくなかで、日本

では過去の歴史が積み上げられずに消えていっているように思うのです（欧米は、過去の歴史の蓄積をもったまま、いまの多様性にあたっている、という個人的印象なのですが）。また、科学の発展と専門分野の分化により、全体が見えない、という状況も昔からでしょうが言われています。

そういった問題への一つの解決策として、乱暴ですが、ざっくりとでも全体の流れを見る、ということに自分はこだわっているのだと思います。カタログ的にすべてを等価値に並列しては、重要性の違いがわからず（そもそも、カタログ的並置は重要性をつけることの否定という位置づけなのでしょうが）、ストーリーがないため、わかりづらいので、情報を得ようとするときの負担が大きいのです。

わかりやすさ、というものには、もちろん、危うさもあります。わかりやすく、簡略化したことで、元の意味と変わってしまうこともあります。どうしても、簡単には説明できない、ややこしいこともあるはずですが、過剰な多様性による共通言語の欠如の原因は、おそらくコミュニケーションの欠如でしょうから、このコミュニケーションのコストを減らすことは大事だと思うのです。

また、そもそも芸術は共通言語を求めざるを得ないのではないかと。例えば、現代アートの分野において、美術評論家のアーサー・ダンターなどの議論から、アートの定義はその

作品をアートの文脈（＝共通言語）に位置づけられ、アートに関する人に認められること、とされています。

または、助成金の問題にしても、いま、多くの芸術は税金に基づいた公的な助成金を受けていますが、その作品が助成金を受けるだけの社会的・芸術史的・人類史的価値があることを、共通言語や価値観に基づいて納税者に説明する必要があります。

西村清和『現代アートの哲学』によると、芸術という概念は西洋の歴史のなかで、人を啓蒙するものとして考えられてきましたが、現代アートの文脈では啓蒙する芸術という概念は相対化されていきます。しかしまだ、人を啓蒙する、歴史的・人類史的（＝共通言語に基づく）価値を生もうとする傾向は芸術に残っているのではないかと、デュシャンの『泉』ですら、やはり、ある種の啓蒙を目指していたのではないかと、僕は思います。そして、そういった価値がなければ、あえて芸術とそうでないものに分ける必要はないのではないかと、固定した知識や概念としての共通言語が必要のではなく、ある文脈のなかで新しい価値を更新しようとすることは、新しく共通言語をつくらうとする動きなのではないかと、ということ。納税者にとっての価値にせよ、人類にとっての価値にせよ、それはある種の共通言語、共通の価値観に基づくもので、だから、芸術に関わろうとする人は共通言語を求めようとする動きに必然的に関わらなければならないのではないかと。

日本の共通言語のなさ、共通の価値のなさ（あるいはその言語化の足りなさ）、大きな思想のなさについて、思想家の丸山眞男は、日本が西洋の思想を歴史的な文脈を踏まえずにつまみ食いの受容したとしています。歴史的に、ある思想がどのように前の思想を更新したかが理解されないため、併存してしまうのではないかと。芸術もそういったつまみ食いの受容がいまも続いているのではないかと。

それが日本的だ、という考えもあると思います。大きな思想がなく、つねに、その場しのぎのブリコラージュ的な態度で良いじゃないかと。もちろん、その良さもあり、程度の問題だとは思いますが、一方で、司馬遼太郎の従軍体験の話を思い出してしまいます。日本軍は、たとえば戦車が故障したときに現場で、その場のしぎで直す、ということは得意な一方、その戦車自体の装甲がロシア軍の戦車の砲弾が貫通するかもしれないほど弱いこと、あるいは、そもそも戦争全体をどうするかという戦略が欠けていたということです。人は大きな流れには逆らえず、ただ流されるしかない、という考えもあると思います。ですが、それに逆らおうとすることが間違っているとも思えないのです。

研究室運営での問題

思想史研の室長として研究室を運営していて、多くの問題がありました。その一つに、

『展示と実演』の時期に僕が研究室のメンバーの一人とケンカをしたことがあります。ブックガイドの印刷・製本の際の、製本のやり直し作業中に、印刷前に校正を出すべきだったことを僕が彼のせいにしたためでした。自分としては冗談のつもりでしたが、疲れていたこともあり、言いかたのニュアンスが良くなかったのかもしれない。あるいは、スケジュールが切羽詰まっていた、どちらも気づくべきだった校正の出し忘れに気づかなかつた、慣れない作業や研究所以外の仕事で疲れてストレスが溜まっていたからだと思います。とはいえ、他に問題がなかったのか。ミーティングでは要点を詰めて話し、その後、雑談をする、というようにしていました。ですが、ちゃんと理念ややりたいことを話し合えていたのか。あるいは、一緒に何かをする上で、ユーモアや言葉のセンス、ノリが合うことは重要だったのではないか。より単純に、慣れていないからか。

共通言語をつくるための企画で、この「ケンカをした」というのは重要だと思います。ユーモアや言葉のセンス、ノリの合わなさを原因として挙げましたが、これも、これまでの経験や興味の差によるもので、広い意味で共通言語のなさから生まれたのだと思います。さらに、きちんと話し合えていたか、不安でもありません。

共通言語を求めるのは、ひとつには共通言語がないことによる不便さの解消を目指したためです。ですので、このケンカを不快に思う、ということは、まさに共通言語が必要な

のだと言えるかもしれません。

一方、当たり前なのですが、共通言語のないなかで対面する相手と、なんとかやりくりすることが重要だとも思います。ブックガイドという手法は、共通言語を生む一つの手段になりうると思いますが、そうでないコミュニケーションの取りかたも重要なのでしょうか。

活動を停止した理由

ブックガイド完成後、配布した人々から反応を聞いたところ、作成時のブックガイドの目標や対象とする相手が明確でないように思えてきました。全体性を目指したものの、ざっくりとした感じやわかりやすさはつくれなかったように思います。長島からも、もう少し載せる本を削るよう勧められました。

削るためには、さらによく本を読み、考える必要がありました。実はもともと思想史研を立ち上げる際に、この研究室は僕の独裁で進行させることを決めていました。責任をもって関わり続ける人が必要だと思ったこと、企画進行上での意思決定の方法を明確化した方が良いと思ったこと、そして自分が納得できる企画にしたいと思ったからです。ですが、ブックガイドに関しては、コンパクトにしすぎると全体性に欠け、「個人的に重要だと思う本のリスト」という、よくあるものになるのではないか、それでは意味がないので

はないか、と考えるようになりました。またこれ以上、一人で本を読み続けることにモチベーションが上がらず、時間がないこともあり、諦めました。本のリストをより良いものに更新し、WEB版をつくることも考えていましたが、実行には移せませんでした。

活動を停止した他の理由として、研究所の外で勉強会を始めたこともありです。同年代の人達と定期的に読書会を始めました。誰も利用せず、載っている本を読まないかもしれないブックガイドの作成を続けるより、レジュメを切り、参加者に本の内容を説明しつつ、議論した方が、ブックガイドの目標である共通言語の作成に役立つのではないか、と考えました。

勉強会のメンバーを巻き込みつつ、研究所の活動の一環として、ブックガイドの作成ができないか、とも考えたのですが、長島に「研究所でやるには共催事業の関係上、企画を上げて承認を得ないと動けない仕組みがある」「朝比奈君がやりたい、早いスピード感で臨機応変に進めるのは、研究所では難しいかもしれない」とアドバイスされ、研究所とは切り離れた活動にすることにしました。

勉強会の方では、ブックガイドのWEB版としてやりたかった、WEB上の同人誌のようなものを不格好ながら始めようとしていて、そちらで思想史研でやろうとしたことを継続しようとしています。